

第 6 回外国語ワーキンググループについて

2016 年 2 月 23 日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

10:00 から 12:00 まで文部科学省 15F 特別会議室で行われた。
一般傍聴者は 40 名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 外国語教育の改善充実について

- ① 江原委員（神奈川県立国際言語文化アカデミア）発表
「高等学校の指導・評価の現状と改善の方向性について」
- ② 平岡委員（広島県立神石高原町立油木小学校）発表
「小学校外国語活動・外国語の評価について」

2. その他

本日は主に「小・中・高等学校の学習評価の在り方」「英語以外の外国語の扱い」が議題となる。

まずは配布資料について、事務局より説明があった。

一つ目は「英語力調査結果（高 3、中 3）の速報」についてである。

高 3 については 2 年目であり昨年度より若干の改善の傾向が見られたが、4 技能すべてにおいてまだ課題が残っている。また、生徒の学習意欲や技能統合型の活動についても課題であるという。

二つ目は「学習評価の改善に関する主な論点（案）」についてである。

これまでの総則・評価特別部会での議論を踏まえ、学習評価の在り方についての論点を示した。現行では「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」の 4 観点で評価しているが、新課程では「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点から評価していくことになる。目標との関係を明らかにしながら、教科の特性を考慮しつつ評価の質を高め、生徒の学習意欲向上につなげていく必要がある。

10:30 より江原委員と平岡委員の発表がそれぞれ 15 分ずつ行われた。

江原委員は主に高校教員の研修を担当する立場から、その現状と今後について述べた。口頭でのやりとりを重んじる方法を研修することによって、少しずつその成果は出てきているという。研修が正しく理解されなかったり、周囲の阻害要因があったりしてうまく改善されないケースもまだ多いが、この方向性をさらに推し進めて支援する必要があるとの

ことである。

平岡委員は小学校における評価の現状と課題についてである。
外国語活動について現状では、授業での行動観察、毎時間の振り返りカード点検・分析、ワークシートの点検によって評価を行なっている。通知表などでは文章記述により評価することになっており、教師の負担も大きく、児童に伝わりづらいという課題がある。英語科になると、動画を撮影するパフォーマンス評価を実施しており、評価規準を明確化することが重要である。ここでは、撮影に時間がかかることが課題となっている。

これらの発表を踏まえ、評価方法に関して議論が行われた。

評価をするために、意欲・態度の積極さの程度が判断しにくいとか、プリント課題や統合的な活動など評価の枠に入らない部分があるなど、現状で様々な問題があるという。
また、実際に評価した結果を見た時も、総括して評価するために4技能がそれぞれどういう状況であるのかはわかりにくいので、評価の観点をもっと柔軟にしてもよいのではという意見もあった。

CAN-DO 形式の目標がうまく評価の3観点に落とし込めるのか疑問だと難しさがあることを認識しながらも、目標と評価基準の一貫性が必要であるとの意見があった。「知識・技能」と「思考・判断・表現」などの観点で切り分けられないグレーゾーンがあるので、指導要領内で具体的に書き分けるべきだとの意見もあった。

現状でも教師の負担はとて大きいので、評価を複雑にせず、シンプルにするべきで、すべてが多様・多面的な評価である必要はないとする意見もあった。

11:50 頃から英語以外の外国語について、事務局より説明があった。

現在、708校で15言語の授業が開設されている。学習指導要領内では、「その他」としてまとめて記述し英語に準じるとされており、支援できていない状況であるようだ。

アジアの一員として幅広く英語以外の言語もやるべきとの意見もあり、今回はこの点についても具体的に議論する予定である。

今回は3月22日(火)10:00~12:00、文部科学省15階特別会議室にて開催予定である。小学校部会、総則・評価部会ともやりとりをしながら、ワーキンググループとしてのまとめへと向かう予定である。